灯台を目指し

すだち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灯台を目指し

【Ｎコード】
Ｎ３９４８Ｅ

【作者名】
すだち

【あらすじ】
途方に暮れる主人公が…偶然たどり着いた町で様々な出会いの中、新たな人生を歩き始め幸せを掴もうとするが…しかし……

難破船

【昨晩　あなた達が逢っているのを見ました　　言い訳など要りません　　最愛の人に裏切られていた　惨めな私を探さないで下さい】

明らかに他人行儀な文面で…　絶縁宣言の短いメールを　一斉送信すると電源を切った…

梅雨空が…　　僕を代弁しているかの様に　降り続く通りすがりの見知らぬ町で……

幾つかの季節が過ぎ…
山々の雪化粧も薄くなり始めた

そんなある日

もう…　鳴る筈のない携帯電話を片手に　まだ夜風が少し肌寒く
微かに灯台の見える埠頭の波打ち際を歩いていた

この片田舎の漁師町に辿り着いてから　　かれこれ何ヶ月が過ぎたのだろうか…？

大都会では考えられない程の自然　山には緑が広がり　海から潮の香りと波の声が聴こえる　　何故か？　緩やかにさえ思える時の流れと　　何より　心地よいとさえ感じる人と人の繋がりに囲まれた感覚…　《錯覚なのかも知れないが…？》　　言葉では表せない感覚…　　良し悪しではなく　今まで触れる事もなかった　　そんな場所だった

真っ暗な埠頭から　少し離れた岬の影に光りが見えた　　この辺りの静か過ぎる夜の海には…　あまりにも不似合いな灯りを照らしながら　定期便のフェリーが出航した様子だった　この光景を初めて目の当たりにした時　　凄く驚いたのを覚えている　　それが不似合と感じた最初の夜だったが　　この町に辿り着いて間もない頃は　頻繁に眺めていた気もする…

「もぅ！　こんな時間かぁ～　明日は早いから…　そろそろ帰るとするか～」　　そんな独り言を呟きながら　　微かな灯台と不似合いな灯り以外は　暗く静かな埠頭をあとにした

【ジリリリ～】
船頭《船長》の奥さんから貰った目覚ましが……　響いているような……　夢の中のような…

（ハッ！）

今朝は早朝から　丘の仕事《破れた網を直す等》を頼まれていたのだ…

行く当ても無かった僕は…　底引き漁船の船員として働き暮らしていた

髪の寝グセにも構わず　海沿いの道を漁港に向け自転車を走らせた
　水平線は昨夜の静けさとは　また違った表情を見せ　漁師町
　独特の雰囲気に包まれた朝の顔を見せる

この町じゃ当たり前の朝なのだが…

少しは慣れてきた気もするが…

潮風を受けながら自転車は徐々に加速していく
「瞬ちゃん　おはようさん！　お出掛けかい？」
干物屋の気さくなオバちゃんが声を掛けてくれる

都会じゃ経験した事もない早朝の１コマ

「おはようございます！　網仕事なんだぁ～」そう笑顔で返しながら　海沿いの道を山手に外れ　　あの橋を渡ると…　　とうとう急な登り坂が待っている　　その難所とも呼べる坂道を越えると波止場の作業場なのだが……

僕はスピードを保ちながら　（よし行くぞ！）　一気に登り切ろうとペダルを思いっ切り踏みしめる

　　そのとき…

そんな僕をよそ目にクラクションで煽るかのように船頭親子が軽トラで抜かして行った

思わず足を付いた僕は…　　自転車を押すハメに…　　そんな自分へ言い訳を繰り返しながら……

息を整えつつ　ようやく作業場に着くと　　船員達はニヤニヤしながら　「おはよう～　お疲れ～」　「遅いぞぉ～　肩で息してるぞぉ～」　「お疲れさん　けど仕事は今からやぞ～」　　等と声を掛けて来る

難所を乗り越えた英雄を讃えるような…

息づかいを半笑いするような…

そんな挨拶に…　僕は苦笑いで応えるしか無かった…

そもそも漁師とは…

気性が荒く昔気質
言葉少なの堅物者

そんな風に思っていたが…

この船《大晴丸》は　一般的な漁師のイメージとは程遠く　流行りの話題や冗談が飛び交う　　都会で生まれ育った僕の固定観念を払拭する　　そんな船頭と船員達だった

まさか…　こんな仲間と遠い町の何処かで　自分が魚を取っているとは…　数年前には想像もしなかった

そんな僕が大晴丸に乗るキッカケと成った出来事は…

深夜　酔いつぶれ路上で眠る船員に気づき　船頭宅に送り届けた事から始まった

流れ者の僕と　長年漁師を営む船頭夫婦　　当然ながら面識や接点もない　増して真夜中の訪問者にも関わらず…
船頭夫婦は　「ありがとうねぇ～　さぁ～上がってお茶でも飲んでって～」　　そう告げると僕の背を押し招き入れたのだ

もともと行く当てもない僕は　久しぶりに人と接した喜びに思わず

…　しばらく他愛もない話にふけっていたが…

時計が目に入り我に返ると

「ご馳走様でした　そろそろ行きます」と切り出した

すると…　僕の心を見透かしたかの様に…

「もし孤独で行き先のない旅なら　何か答えが出るまで居れば良い」

そう船頭が告げると　奥さんも頷き微笑んだ

そんな奇妙な出会いに甘え　こうして世話になっている……

早朝からの仕事も正午を過ぎた頃

「おい！　昼行くぞぉ～」そう船頭が告げると

みんな我先にと軽トラの荷台に乗り込む　荷台で受ける潮風

は格別である　勿論　難所の急坂も　お構いなしに駆け上がり　馴染みの食堂《朝凪》へ…

「毎度！　いらっしゃい」奥の方から女将さんの甲高い声がする

「お母ちゃん　ビール貰うわ～」　そう言って　檀さん

《ベテラン漁師》が号令を発すると　昼間っからの宴会が始まる

（こんな感覚は漁師らしいのかも？知れない…）

「おぃ！　瞬　呑んでるか？」　明らかに赤くなった顔で　檀さんが顔を寄せると　ニヤリとしながらトモシ《船長の次に偉い》の兼ちゃんが　「瞬は　よぅ～呑みよらへんで～」　と煽り出す…立て続け三杯のコップ酒を　半強制的に呑まされると…

酔っ払い達の話題は　またまた変わっていた…

「お母ちゃん！　今日は凪ちゃん居らんのかぁ～？」　海翔くん《船頭の息子》が少し照れながら　厨房を覗き込む

「そやぁ～　凪は休みかいなぁ～？」　檀さん　兼ちゃんも続く

「ごめんなぁ～　凪は　向こうの仕事やわぁ～」　女将さんは申し訳なさそうに応えた

僕も　凪ちゃんとは何度か会ってるが　朝凪の看板娘で　この辺りでは　かなり評判の娘さんである　介護の仕事をしながら　食堂の手伝いをしているみたいで…　今日は介護の仕事らしい…

こんな調子で宴会は続いたが…

食堂の窓から夕陽が差し込む頃　誰が言い出した訳でもなく　真っ昼間の宴会と途中で置いたままの網仕事は終わりを告げ解散した…

その夜から春一番の突発的な暴風が吹き　しばらく時化《海が荒れた状態》が続くのだった…

新しい船出

あくる朝…　死神のお迎えが待っていた　鉛のような身体で布団から這い出すと　冷蔵庫に向かい渇ききった喉を潤した　血管をアルコールが流れているように思える…　自業自得とは良く言ったものだ

こんな僕とは裏腹に　窓の外からは燦々と光りが差し込んでいるのが見えた　本来なら最高の買い出し日和なのだが…　こんな状態では流石に出掛ける意欲も湧かず　布団の中に引き返した…

しばらくして…　物音に目を覚ますと　玄関越しにドアを叩く影が見えた

鍵を開けると兼さんが飛び込んで来た　外は少し暗くなり月明かりが海面を照らしている　どうやら眠ってしまったみたいだ…

兼さんは慌てた様子で言った　「瞬！　ワシの携帯しらんか？　みんな知らん言うてるんやわ～」　寝起きの僕は　その勢いに圧倒されつつも徐々に微かな記憶を呼び戻していったが…　やはり携帯電話の事など知る訳もなく

「すいません　分からないですねぇ～　朝凪には？　家とか？　あの後って兼さん真っすぐ帰りました？」　と一通りの予測を並べてはみたが　兼さん自体の記憶が曖昧らしく　心当たりは探したみたいで行き詰まり首を傾げるだけだった…

同情した僕は　「最新の機種は良いですよねぇ～　凄く機能も良くて…　そろそろ僕も買おうかな～　一緒に見に行きませんか？」
　等と方向を変え励ましていた

すると
兼さんは何か吹っ切れたように　「何か…　お前を見てると携帯なんて　どうでも良くなって来たわ～　落とした物は仕方ない
これで　お互い携帯ない者同士やなぁ～」　と笑いながら握手を求めた　僕も少しホッとして笑顔を浮かべ握手に応じたが　兼さんは即座に表情を変え　「けど　お前は何で切れたままの電話を持ち歩いてるんや？」　と尋ねたのだった

思わず…　僕は少し俯き加減になった
そんな僕を見た兼さんは　慌てて話題を変えようと混乱気味になり黙り込んでしまった…

だが僕は僕自身　本当の再出発をすべく顔を上げた　そして兼さんの眼差しに心を許す決意をし正直に話し出した　「実は…　将来を約束していた彼女が居たんですけど…　その娘が何故か？日を追う毎に様子がおかしくなって……」
込み上げる物に少し詰まらせながら話を続けた
「逢う日も限られ減って行き　最終的にどうなったと思います？
　僕の父親とホテルから出て来るのを見てしまったんですよ！」

口を挟まず聞いていた兼さんも驚きと怒りを隠せず　「何やそれわ！　意味が解らん　けど…　そいつらは何時から出来てたんや？」
と荒げた口調で身を乗り出した

あの時の衝撃的な光景に考えさえしかった兼さんの質問に　「エッ！　それは…　いや時期までは知りませんが…」　答えに戸惑って見せたが話を戻し　「家は小学生の頃に母を亡くしてて父一人子一人　凄く大切に育ててくれてたし　彼女も幼なじみで家族ぐるみの仲だったんです　それに学生時代から五年も付き合ってたから分かり合えてた筈で…　なのに…　信じていたのに裏切られていたって事が…　まさか…　本当に信じられなくて…　絶対に許せなくて…　でも…　でも……」
頬をつたい我慢していた滴を落とし話を続けようとした時　兼さんが僕の話を止めた　「もういいよ瞬　辛かったやろなぁ～　もう忘れたらえぇ～　女なんか山ほど居るし　ここは田舎やけど楽しい事かってあるぞ」　慰める兼さんの頬にも涙が溢れていたのが判った

お互い次の言葉が見当たらず　しばらく沈黙は続いた…　その静寂な時間は男2人に落ち着きを取り戻させ何故か恥ずかしさを注入した
この空間の居心地の悪さを感じた僕は　「兼さん晩飯まだでしょ？　腹減った～　さぁ～行きましょう」　と照れ笑いしながら言った　兼さんも照れながら大きく頷いて　すぐさま立ち上がると　「朝凪でえぇなぁ～」　と残し急ぎ足で玄関を後にした
僕は着替えて用意をすると後を追った

今夜は風も強く肌寒い夜に拍車がかかる　早足で歩き坂道の途中で追いつくと　　もう兼さんは何も無かったかのように　いつものニヤケ顔で　「凪ちゃん　お前を気に入ってるらしいぞ　　えぇ娘やし付き合ったらどうや　ワシも応援したるから」　　と言って一段とニヤニヤしてきた　　僕は内心　少し喜びながらも両手を振り気丈な態度を見せてみたが　それを察知した兼さんは更にニヤケ顔をして言った　　「嘘ちゃうぞ～　女将が凪の好きなタイプや言うてたし　　お前が携帯を持ってない言うたら残念がってたわ」

そんな歩きながらの冗談や噂話とも取れる会話が途切れた頃　朝凪に到着した　　ゆっくりとガラス戸を開けると何時も混み合う食事時にしては空いている感じに映った

「いらっしゃいませ　今日は兼さんと瞬ちゃん2人？」　　そう言って凪ちゃんが出迎えてくれる

そう！　女将か凪ちゃんが出迎える　別に普通の事なのだが…先程の話の直後もあってか変に意識してしまい　眼を合わせる事も出来ず席についた

すると

「瞬ちゃん　今日は何か元気ないねぇ～　どうしたの？」　　笑顔を少し曇らせた感じで凪ちゃんが聞くと隣で兼さんがニヤケている

慌てて僕は　「別に普通　元気　元気」　そう返したが
逆に意識してしまい普通じゃなかったかもしれない…
そんな状況を肴にしているかの様に　兼さんはビールを注ぐと凄く
美味しそうに飲んでいる　そのまま僕は凪ちゃんに定食を注
文した　流石に昨日の今日で僕はとても飲めそうになかった…
そんな僕の前で兼さんは　まるで宴会の影響もないかの様に
飲み続けた
ビール　水割り　熱燗と…

すると閉店時間が過ぎたのか提灯と看板を消した女将が　「兼さん
頂いて良いかな～？」　とグラスを片手に腰を掛けた
これも良くある光景だったのだが…　普段は素面で見た事が
なかった光景に何か客観的な違った印象を持った
閉店作業を終わらせた凪ちゃんは夜市に仕入れを頼まれたらしく
丁度…　飲めずに暇そうな僕は兼さんの強引な話の流れ上　夜
道の護衛に付き添う事になった

月明かりが照らす寒空の中　少し緊張気味に夜市へ向かった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3948e/

灯台を目指し

2010年10月20日01時17分発行